魯迅文集第五巻
一九七八年一月三〇日初版第一刷発行
訳者　竹内好
発行者　岡山猛
発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二―八郵便番号一〇一―九一
電話〇三―二九一―七六五一振替口座東京六―四一二三
印刷・精興社　製本・牧製本
1397-78005-4604

同志小林の死を聞いて

同志小林ノ死ヲ聞イテ
日本ト支那トノ大衆ハモトヨリ兄弟デアル。資産階級ハ大衆ヲダマシテ其ノ血デ界ヲエガイタ、又エガキツツアル。
併シ無産階級ト其ノ先駆達ハ血デソレヲ洗ッテ居ル。
同志小林ノ死ハ其ノ実証ノ一ダ。
我々ハ知ッテ居ル、我々ハ忘レナイ。
我々ハ堅ク同志小林ノ血路ニ沿ッテ、前進シ提手スルノダ。

魯迅

忘却のための記念

一

私はとうから、なにか短い文でも書いて、数人の青年作家を記念したいと思っていた。それというのは、ほかではない。二年このかた、悲憤がしきりに私の心に襲いかかり、今になっても止まないのである。私は、文を書くことによって、身をゆすぶり、悲哀をふりはらって身軽くなりたかったのである。はっきりいえば、私はかれらのことを忘れたかったのだ。

二年前のこの日、すなわち、一九三一年二月七日の夜、あるいは八日の朝、それは、われわれの五人の青年作家(1)が、同時に殺されたときである。当時、上海の新聞はどれも、この事件を報道しようとしなかった。報道したくなかったのかもしれないし、あるいは報道に価しないと考えたのかもしれない。ただ『文芸新聞』に、それとなく暗示する記事が載っただけである。その第十一号（五月二十五日）に、林莽氏の筆になる「白莽印象記」一篇があり、それに次のような一節があった。

「かれはたくさんの詩を作り、また、ハンガリーの詩人ペテーフィの詩を数首訳した。当時『奔流』の編集者であった魯迅は、かれの投稿を受けとると、すぐ手紙を出してかれに面会を求めた。しかしかれは、有名人には会いたがらなかった。そこで結局、魯迅のほうから会いに行って、ぜひ文学の仕事をやるように極力すすめた。だがかれは、ついに屋根うら部屋に閉じこもって執筆を続けることができずに、またも自分の道へ飛び出していった。間もなく、かれは再び捕えられた。……」

ここに書かれている私たちのことは、じつは正確でない。白莽は、それほど高慢ではなかった。かれは私の寓居へ来たことがある。だがそれは、私がかれに面会を求めたからでもない。面識のない投稿者を、軽率に手紙で呼びよせるほど、それほど私も高慢ではない。私たちが会った事情は、ごく平凡である。そのときかれが投稿したのは、ドイツ語から訳した「ペテーフィ伝」だったので、私は手紙を出して、原文を求めたのである。しかし原文は、詩集の前に載っているもので、郵送が不便だったので、かれが自分で持ってきたのである。見ると、二十歳あまりの青年で、容貌は端正で、色は黒かった。そのときどんな話をしたかは、もう忘れた。ただ覚えているのは、かれが自分から、姓は徐で、浙江省の象山の出身だといったことだ。私が、なぜ君の代理で手紙を受け取る女の人は、あんなおかしな名前（どんな風におかしかったかは今では忘れた）なのか、と尋ねると、かれは、かの女はおかしな名前をつけるのがすきなのです、ロマンティックなのです、自分とピッタリ気が合っているわけではない、と言った。これくらいのことしか記憶に残っていない。

夜、私はざっと訳文を原文と対照してみた。いくつかの誤訳のほかに、故意の曲訳がひとつあるのに気がついた。かれは「国民詩人」という語を好まないらしく、すべて「民衆詩人」と改めてあった。次の日、かれから手紙がきて、それには、私との会見を悔いていること、かれのほうがよけいにしゃべり、私があまりしゃべらず、しかも冷やかで、威圧めいたものを受けたような気がする、とあった。私はすぐ返事を書いて、初対面のとき口数をあまりきかぬのは、世の常の人情であると釈明した。そして併せて、自分の愛憎によって原文を改めるべきでない旨を告げた。かれの原書は私の手もとに留めてあるので、私の蔵する二冊の集をかれに送って、あと何首か訳して読者に提供してはどうか、と問いあわせた。かれはそこで数首訳して、自分で持ってきた。私たちは、第一回のときよりも多くしゃべった。この伝と詩とは、のちに『奔流』の第二巻第五号、すなわち最終号に載った。

私たちが三回目に会ったのは、ある暑い日だったと覚えている。戸を叩くものがあるので、私が出てあけてみると、その客が白莽だった。厚い綿入れを着ていて、顔じゅう汗だらけで、思わず双方ふき出してしまった。そのときはじめて、かれは、自分が革命家であると私に打ちあけた。つかまって、いま釈放されたばかりだ。服も本も、私が送った二冊を含めて、全部没収された。いま着ている長衣は、友人のところから借りてきた。あわせがなく、しかし長い服をぜひ着なければならぬので、やむをえずこんなに汗を流すのだ、といった。たぶんこれが、林莽氏のいう「再び捕えられた」の二度目のときだろうと思う。

私は、かれが釈放されたことを心から喜び、さっそく原稿料を渡して、あわせを一枚買えるようにしてやった。だが一方では、私の二冊の本のことを痛嘆した。警察の手に落ちたとあっては、まことに明珠を闇に投じたようなものだ。その二冊の本は、もとはごくありふれたもので、一冊は散文、一冊は詩集、ドイツ語訳の訳者の説明では、これはかれが集めたもので、ハンガリー本国でも、こんな完全なテキストはまだ出ていないという。しかし、「レクラム文庫」にはいっているので、ドイツなら、どこでも手に入るし、値段も一円しない。ただ私にしてみれば、一種の宝物であった。なぜなら、それは三十年前、ちょうど私がペテーフィを熱愛していたころ、わざわざ丸善書店に頼んでドイツから取りよせたものだから。おまけに、ごく薄い本なので、店員がめんどくさがりはしないかと思って、おそるおそる注文したものだった。その後、ほとんど身辺から離さなかったが、ただ、気持ちはだんだん変ってきて、もう訳す気はなくなっていた。今度、当時の私とおなじようにペテーフィの詩を熱愛している青年に送ることに決めて、ようやくその本のために安住の場所を探し当てたつもりだった。そのため念をいれて、柔石に頼んでわざわざ送りとどけてもらったのである。はからずもそれが「三本筋」(2)などの手に落ちようとは、情ないことではある。

二

私が投稿者を呼びよせないのは、じつは謙虚さのためばかりとはいえない。面倒をいとう気持ちも多分にある。これまでの経験からして、青年たち、ことに文学青年たちは、十人のうち九人までは感覚が鋭く、自尊心が強くて、うっかりするとすぐ誤解されかねないことを承知しているので、そのためわざと避ける場合が多かったのである。面会を恐れるくらいだから、ものを頼むなど、思いもよらなかった。しかし、そのころ私は上海で、ただひとりだけ、勝手な熱も吹ければ、私用を頼んでも気がおけない青年がいた。それが、本を白莽にとどけに行ってもらった柔石だった。

柔石との初対面が、いつ、どこであったか、覚えはない。かれは、北京で私の講義を聴いたと語ったように思うから、そうすると、八、九年前ということになる。上海でどうして往き来するようになったかも、覚えていないが、要するに、かれはそのころ景雲里に住んでいて、私の寓居とは、家数にして四、五軒しか隔っていないので、何かの機会に、往き来がはじまったのである。たぶん、その最初のときと思うが、かれは、姓が趙で名が平復だと名のった。もっとも、かれはまた、自分の郷里では豪紳の鼻息が荒い、という話をして、その例として、ある紳士が、かれの名前が気にいって、自分の息子につけるために、かれにその名前を使うことを禁じた、と語ったことがある。それからみると、かれのもとの名は「平福」ではないかと思う。平穏にして有福、ということではじめて郷紳の気にいるはずである。「復」の字では、それほど執心しまいから。かれの郷里は、浙江省台州の寧海である。そのことは、かれの台州かたぎの骨っぽさを見れば、すぐわかる。そのうえ、融通のきかぬところがあって、私は時々、何ということなしに方孝孺(3)を連想して、きっとこんな人だったのではないかと思うことがある。

かれは寓居にこもって、文学をやっていた。創作もするし、翻訳もした。私たちは、往き来の日が重なるにつれて、話のうまが合った。そこで、おなじ考えをもった青年を数人ほかから加えて「朝華社」(4)を設立した。目的は、東欧と北欧の文学を紹介し、外国の版画を輸入することにあった。というのは、私たちは、質実剛健な文芸を植えつけねばならぬと考えていたからである。つづいて『朝花旬刊』を出し『近代世界短篇小説集』を出し『蕗谷虹児画選』を出し『芸苑朝華』を出した。いずれもこの線に沿ったものであった。ただそのなかで『蕗谷虹児画選』一冊だけは、上海の露店にころがっている「芸術家」を掃蕩するために、すなわち葉霊鳳という張子の虎の仮面をはがすために出したのである。

しかし柔石自身は金がなかったので、かれは二百元あまりの金を借りて資本にした。紙を買った以外は、大部分の原稿と、印刷屋へ行ったり、製図したり、校正したりする雑務を、すべてかれがやった。それでも不如意なことが多くて、その話をするときは眉をひそめた。かれの古い作品を見ると、非常にペシミスティックだが、本人はそうではなくて、人間の善良さを信じていた。

私がときどき、人はいかに人を騙すか、いかに友を売るか、いかに血を啜うか、というようなことを口にすると、かれはひたいを光らせて、びっくりしたように近視の眼を見はって、抗議するのであった。《まさか、そんなことが――それほどじゃないでしょう……》

だが朝花社は、間もなくつぶれた。そうなるまでのいきさつについては、私はいま語りたくない。ともかく、柔石の理想は、まず大きな釘に頭をぶつけたわけだ。精力はむろんムダになったし、そのほかに金を百円借りて紙代を支払わねばならなかった。それからというもの、私の「人の心は鬼」説(5)への懐疑はさすがにへって、ときには《ほんとに、そんなものですかね……》と嘆息することもあった。だがかれは、やはり相変らず人間の善良さを信じていた。

そこでかれは、自分の受け取り分の朝花社の残本を、明日書店と光華書局へ送って、いくらかでも金の回収をはかるとともに、借金を返すために猛烈に翻訳をやり出した。それが、商務印書館へ売った『デンマーク短篇小説集』とゴルキイの長篇小説『アルタモノフの事業』であった。もっとも、それらの訳稿は、ひょっとすると去年の戦火(6)で焼かれてしまったかもしれない。

融通のきかぬかれの性質も次第に変ってきて、しまいには、女性の同郷人や友人といっしょに道を歩いたりするようになった。といっても、少くとも三、四尺の距離はいつも保っていた。このやり方は、うまくなかった。たまに私が道でかれに出あうときは、もし前後または左右三、四尺の距離に若い美しい女がいると、それがかれの友人ではないかという疑いがおこるのである。だがかれは、私といっしょに道を歩くときは、できるだけ寄り添って、ほとんど抱きかかえるようにする。私が自動車や電車に轢かれてはと気づかうためである。私のほうでも、かれが近視のくせに人をかばうのが気になって、双方うろうろして、歩いている間じゅう心配になる。それゆえ、万やむをえない場合のほかは、なるべくいっしょに歩かぬことにした。かれの気苦労を見ていると、見ている方でも気骨が折れるのである。

旧道徳によろうと、新道徳によろうと、自分が損して人を利することであれば、かれはそれを選び取って、わが肩に担った。

かれは、ついに決定的に変った。あるとき、はっきり私にこう言った。今後は作品の内容と形式とを転換しなければなりません。それはむずかしかろう、と私は答えた。たとえば、刀を使い慣れたものに、今度は棒を使わせようとしても、うまくいかぬだろう。勉強するだけです、と、かれはポツンと答えた。

かれの言ったことは少しも嘘ではなく、ほんとに新規まき直しに勉強をはじめていた。そのころ、かれは友人をひとり連れて私のところへ来たことがある。それが馮鏗女史であった。かなり長時間にわたって談話を交したが、私はどうしても、かの女には打ち解けられなかった。ロマンティックなところがあって、功を急いでいる風に見えた。それに、柔石がちかごろ一大長篇小説を書こうとしているのも、かの女の主張から出たのではないかと疑われた。しかし私は、自分のことも疑ってみた。ひょっとすると、このあいだの柔石の断乎たる回答が、じつはなまけぐせの口実に過ぎない私の論の痛いところをピタリと射抜いたために、私は無意識のうちに怒りをかの女の上に移しているのではないだろうか――正直いって、私は、自分が会うのを恐れる神経過敏な、自尊心の強い文学青年より、何ほどもえらくはないのだ。

かの女は、からだが弱く、美人でもなかった。

三

のちに、左翼作家連盟が成立してから、はじめて私は、私のつきあった白莽こそ『拓荒者』(7)誌に詩を書いている殷夫であることを知った。ある大会のとき、私は、あるアメリカの新聞記者のために書いた中国遊記のドイツ語訳を、かれにやるつもりで持っていった。ドイツ語の練習の足しにでもと思っただけで、べつに深い意味はなかった。しかし、かれは来なかった。私はまたも、柔石に託すほかなかった。

だが、間もなく、かれらは同時に捕えられた。私のこの本もまた没収のうき目を見、「三本筋」一派の手におちた。

四

明日書店で、雑誌を出す計画があって、柔石に編集を依頼し、かれはそれを承諾した。書店では、私の著書または訳書も出版させてもらいたいということで、かれを通して印税のことを問いあわせてきた。私は、北新書局と交してある契約書を一部写して、かれに渡した。かれはそれをポケットに入れて、そそくさと立ち去った。それが一九三一年一月十六日の夜である。そしてそれが図らずも私とかれとの最後の会見になった。私たちの永別となった。

翌日、かれはある会場で捕えられた。ポケットには、私の出版の契約書がまだ入れたままであった。そのため官憲は、私を探索しているという。出版契約書は明々白々である。だが私は、明白々でないあんな場所へ弁解に行くのは、いやだった。『説岳全伝』(8)のなかに、こんな話がある。ある高僧が、捕手が寺門の前まで来たとき、たちまち「坐化」して、しかも「何立東より来る。われは、西方へ行かん」というような偈を残したそうである。これは、奴隷の幻想する苦海離脱の唯一の良法である。「剣侠」が望めないならば、もっとも自由なのは、こうすることだけだ。私は高僧ではなく、涅槃の自由はないし、まだ生への執着がある。そこで私は、逃げることにした。

その夜、私は、友人たちの古い手紙を焼きすて、妻と子をつれて、ある旅館にかくれた(9)。二、三日すると、外部ではしきりに私が捕まったとか、殺されたとかいうデマが飛んだが、柔石についての情報はさっぱりだった。一説では、かれは租界の警官に連れられて明日書店へ行き、編集者であるかどうか首実検されたといい、一説では、かれは租界の警官に連れられて北新書局へ行き、柔石であるかどうか首実検されたが、手錠をはめられていたところを見ると、重大事件らしい、といった。だが、どんな事件であるかは、誰にもわからなかった。

かれの拘禁中に、私は二度、同郷人あてのかれの手紙を見た。第一の手紙には、こうあった

――

「ぼくは三十五人（うち七人は女）の同囚とともに昨日竜華へ来た。昨夜から足に鎖をかけられた。政治犯で鎖をかけられたのはぼくらが最初だ。事件の範囲はきわめて大、たぶん急には出られまい。書店のほうは君に代理を頼む。今はさいわい元気、殷夫君にドイツ語を習っている。このことを周先生に伝えられたし。周先生に心配されぬよう、まだリンチを受けてませんから。警察と公安局とは何度も周先生の住所をきく。ぼくが知っているわけがない。心配御無用。さよなら。

一月二十四日　趙少雄」

以上が表。

「ブリキの茶碗を二、三個
もし面会不能ならば品物を
趙少雄にと言伝て乞う。」

以上が裏。

かれの心は少しも変っていず、ドイツ語を勉強しようとして、ますます努力しているし、いまなお私のことを気づかってくれるのも、往来を歩いていたときと同様であった。ただかれの手紙には、誤りが少しある。政治犯で鎖をかけられたものは、かれらが最初ではない。かれは役所というものを買いかぶっていたため、これまで文明的だったのが自分たちのときから急に残酷な取扱いになったと思い込んだのだ。じつはそうではなかった。果して、第二信はガラッと変って、文章からして悽惨、そして馮女史の顔が腫れあがったことも書いてあった。惜しいことに私は、この手紙を写しておかなかった。そのころには噂もとりどり、金で保釈になるという説もあれば、すでに南京に移されたという説もあって、たしかなことは何もわからない。その一方、私の消息を問いただす手紙や電報がしきりに来るようになり、北京にいる母までが、仰天して病気になる始末、私は一々返事を出して、デマを否定しなければならなかった。そんなことが二十日ばかりつづいた。

寒さはますます厳しくなる。柔石のところには、フトンがあるだろうか。私たちには、あるのだが。ブリキの碗は、とどいただろうか……だが、突然、たしかなニュースが伝わった。柔石は他の二十三人とともに、すでに二月七日の夜あるいは八日の朝、竜華の警備司令部で銃殺されたというのである。かれは身に十弾を受けた。

そうであったか……

ある深夜に、私は、旅館の庭に立っていた。周囲には、ガラクタが積みかさねてあった。人々は寝しずまっている。私の妻と子どもさえ。私は、自分がよい友を失ったこと、中国がよい青年を失ったことを痛感し、悲憤のうちに沈潜したのであるが、しかも積年の習癖は、この沈潜の底から頭をもたげて、次の数句をものした。

慣于長夜過春時	とこ夜になれて春を過ごし
挈婦将雛鬢有絲。	妻と子とはたわが髪にまじる白毛と。
夢裏依稀慈母涙	夢にうかぶは母の涙
城頭変幻大王旗。	城頭にひるがえる支配者の旗。
忍看朋輩成新鬼	友の死を嘆く身のすべなく
怒向刀叢覓小詩。	武器にたいして求むるはただ詩。
吟罷低眉無写処	詩はあれど写すにところなし
月光如水照緇衣。	月光は水のごと黒衣を照らす。

最後の二句は、のちには正しくなくなった。私はそれを、ある日本の歌人(10)に書き与えたのだから。

しかし中国では、当時はたしかに書く場所がなかったのである。罐詰よりもっと厳重な監禁を受けていたのだから。私は、まだ覚えている。柔石が、年末に郷里へ帰って、かなり長く滞在して、それから上海へもどったとき、ひどく友人から非難されたことがあった。かれは悲憤して、私に言ったものだ。母親はもう両眼ともに失明していて、しきりに彼をとめるものを、振りきってすぐに帰ることができようか、と。この盲いた母親の眷々の情と、柔石の拳々の心とが、私にはわかった。『北斗』(11)が創刊されたとき、私は柔石について何か文章を書きたいと思った。しかし、それができなかった。やむをえず、コルヴィッツ（Käthe Kollwitz）夫人(12)の「犠牲」と題する木版画――ひとりの母親が悲しげに自分の息子をさし出している図を選び、ひそかに私だけの柔石への記念とした。

同時に殺された四人の青年文学者のうちで、李偉森は、私は会ったことがない。胡也頻も、上海で一度会って短い話をしただけである。やや親しかったのは、白莽、すなわち殷夫くらいなものである。かれは、私とは文通もあり、投稿したこともあるが、いま探してみると、ひとつも残っていない。たぶん十七日の夜に全部焼きすててしまったのだろう。そのときは、捕われたなかに白莽もいることはまだ知らなかったのである。しかし、あの『ペテーフィ詩集』だけは残っている。ぱらぱらめくってみたが、やはり何も出てこなかった。ただ "Wahlspruch"（格言）という詩の横に、ペン書きの四行の訳文があった。

「生命はげに尊し、
　愛情はさらに価高し。
もし自由のためとあらば、
　ふたつながら抛つもよし。」

それから、第二ページに「徐培根」の三字が記されている。これがかれの本名(13)ではないかと私は思う。

五

一昨年の今日、私は旅館に隠れたが、かれらは刑場へ赴いた。昨年の今日、私は砲声中を英租界に逃れたが、かれらはすでに、どことも知れぬ地下に埋められていた。今年の今日、私ははじめて元の寓居におり、人々は寝しずまっている。私の妻と子どもさえ。私は今さらのように、自分がよい友を失ったこと、中国がよい青年を失ったことを痛感し、悲憤のうちに沈潜したのであるが、はからずも積年の習癖がまたも沈潜の底から頭をもたげて、以上の文字を綴ったのである。

書いてゆきたいにも、中国の現在には、書く場所はやはりないのだ。若いころ、向子期の「思旧賦」(14)をよみ、その賦がわずか数行の寥々たるもので、発端からすぐ結末になるのを、なぜだろうと不思議に思った。だが、今にしてそれがわかった。

若いものが老いたもののために記念を書くのではない。そしてこの三十年間、私が見せつけられたのは青年の血ばかりだった。その血は層々と積まれてゆき、息もできぬほどに私を埋めた。私はただ、このような筆墨をもてあそんで数句の文章を綴ることによって、わずかに泥のなかに小さな穴を掘り、そこから喘ぎをつづけるだけなのである。これは、いかなる世界であろう。夜は長く、道もまた長い。私は、忘却し、ものいわぬがよいのかもしれない。だが私は知っている。たとい私でなくても、いつかきっとかれらを思い出し、再びかれらについて語る日が来るであろうことを……

二月七日―八日

経験

古人から伝承された経験のなかには、事実としてきわめて貴重なものがある。それは多くの犠牲をはらうことによって、大きな恩恵を後人に残しているからである。

たまたま『本草綱目』(1)をひもといているとき、ふとそのことに思い至った。この本は、ごくありふれた本だが、内容はまさに知恵の宝庫である。むろん、まったく実証を欠く記述がないわけではない。しかし大部分は、薬品の効能について、ながい経験を積んではじめて知識がここまで達したのであって、ことに毒薬についての記述は驚くべきものがある。われわれは従来、古代の聖人をたてまつる風習があり、薬物についても、すべて神農皇帝が独力で、自分でなめて判別したものと考えたがる。かれは一日に七十二種もの毒物にぶつかったことがあるが、解毒法を心得ていたために中毒死しなかったそうだ。こんな伝説は、いまではもう人の心をとらえない。すべての文物は、歴代にわたって無名の人々が徐々に作りあげたものであることを、すでに多くの人が知っている。建築にせよ、調理法にせよ、漁猟や農耕にせよ、すべてがそうであり、医薬もまた例外ではない。このように考えるならば、この問題はまことに重大である。たぶん古人は、病